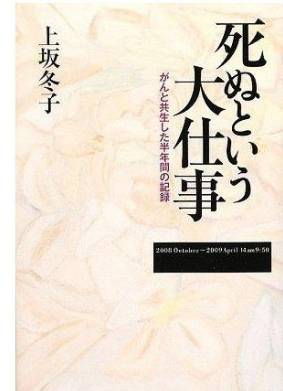


● 井上さんの書籍紹介

「死ぬという大仕事
ーがんと共生した半年間の記録ー」

上坂冬子著
小学館 2009年6月初版



はじめに

手術して5年経ったが、やはり不安なのは再発、転移である。そうして、治療法がなくなった場合、どのようにして、がんと残された人生に向き合えばよいのであろうか。これが問題である。多くのがん患者さんも、私と同じ気持ちであろう。また、今、この立場の人もおられるはずである。さらに、医学が進歩した今日でも、2人に1人ががんに罹り、そのうち約半数は亡くなっている。故に、健康な人でも考えておくべき問題である。

本書は、作家・上坂冬子氏による「死ぬという大仕事」を控え、がんと共生した半年間の記録である。

「治療法がなくなったとき、どのように考えるか」に対して1つの捉え方が示してあり、読み終えると安堵を感じることができた。また、著者の実際の経験を通して、「緩和ケア」についても勉強することができた。私にとって、有意義な本だったので紹介する。

著者の紹介・病歴

1930年6月10日、東京にて生誕。日本を代表するノンフィクション作家。『原発を見に行こう』『「北方領土」上陸記』『戦争を知らない人のための靖国問題』など著書多数。

2005年、卵巣がんに罹患し、某病院にて手術。術後6回抗がん剤治療を受ける。

2008年10月、慈恵医大病院に入院。腹腔内に再発巣、肝臓や肺への転移巣が見つかる。主治医は、消化器・肝臓内科の猿田雅之医師。抗がん剤治療を受けるが、1回目ですのしびれ、脱力感などの副作用のために、歩行困難となり、中止となる。

2009年1月、猿田医師の提案により、緩和ケアを積極的に開始。緩和ケアがご専門である、井上大輔准教授の治療も受けられる。意欲、食欲ともに戻る。

2009年4月14日午前9時50分永眠。享年78歳。

本書の内容・感想・まとめ

「私ご機嫌よ、ご心配なく」

2009年2月初旬。作家、上坂冬子氏はベッドの背もたれにゆったりと身をあずけ、そう言って笑った。東京慈恵会医科大学附属病院に入院して3か月あまり。再発したがんが楽観視できない病状であることは医師団から詳しく説明を受けている。しかし、上坂氏の心は穏やかだ。

「いかに楽に生きるか、それが大事なんです。がんそのものを治療するというだけではなく、気力が充実したり、いったんは薬の副作用で立てなくなったのが歩けるようになったり、食欲が出たりする治療法があるというのはありがたいですね。

もちろん、うまくいくことも、最悪、死んでしまうこともあるんでしょうけれど、80に手が届く気難しい私がかから納得し、わが意を得たりという治療方法に満足している様子を多くの高齢

者に知ってもらいたいとお話しします。私、正直なところ自分のがんが治るとは思っていないの。気の済むように手当てをしてもらえれば治らなくてもいいの」

—本書より—

このような人生観、死生観はどこから生まれたのか。このことに対し、井上先生は以下のように述べられている。

『がんには闘うべきがんと闘うべきでないがんがあり、同じがんでも闘うべき時期と闘うべきでない時期がある。それぞれの患者さんの哲学とか考え方を尊重して、それに合わせた治療をすることが大切である。』

上坂さんは、「人生はそこそこでいい」と言われ、自分の置かれた状態に納得されている。上坂さんは信仰がないとおっしゃいますが、かつての日本人には宗教ではないけれど、それに代わる「諦念」とも言える意識はあったと思うのです。特攻隊員として終戦を迎えた私の父が好きだった言葉ですが、「散る桜、残る桜も散る桜」という良寛の言葉があります。散る桜の美しさを感じる昔の日本人には、何か生死に対して達観したところがあったように思います。』

それを受けて、上坂氏。「ああ、それこそ緩和ケアの真髄とも言える言葉ですね。」

私も再発、転移して治療がなくなった場合、この『諦念』を心の拠にしたい。そうすれば、楽に現実を受け止めることができ、達観した境地に入ることができるのではなかろうか。

今度は、医師の立場として。

『病気を診ずして病人を診よ。』

この言葉は本書の中によく出てくる。慈恵医大の創設者、高木兼寛先生(1849～1920年)の言葉で、緩和ケアを含め医師の心得を示している。この言葉のもつ意味を、今、私自身ががんを患って理解できた気がする。心に沁みる言葉だ。蛇足だが「病気を診る」ことは、医師として当然のことで、もう一步踏み込んで「病人を診る」ことが大切で、医師の人間としての力が試されているのだ。

その他、「最後まで自宅で療養したい人が増えている」というのは誤解で、「末期がん患者さんの約7割は、自宅で療養し、必要になれば入院したいと思っている」ことなども書かれている。

最後に、本書の「おわりに」より。

『緩和ケアの分野がどんどん進んで、がん難民という言葉が普及しないうちに、がん患者が安心できる医療体制が整うことを切に祈る。』

2009年3月の上坂冬子先生の思いである。

ご冥福をお祈りする。

会員 井上 林太郎